

能州奥郡之時。十郎與中村左馬・太田藏人等。守小屋庄河原田館。而須田監物爲將率。越後勢。擄兵船來。小屋庄。夜密將押。上兵船五艘於輪嶋而襲。館。十郎察其機。夜密伏兵於濱邊。越後勢之上陸半途討敵之不意。討取敵兵數十人兵船三艘。而二艘逃退也。翌日越後勢之兵船數十艘。爲押。上小屋庄而襲討館。於是味方兵士奮激而防之。雖然敵多。味方無後詰之援。故守兵悉退。穴水之時。敵兵附慕出三方。數輩戰死焉。此時十郎纏前後之士卒力戰。遂引取穴水也。其後越後勢退奥郡之時。追討之。敵兵再取河原田之館。十郎及山岸左衛門守之。如是與越後勢度々迫合時。十郎勵忠戰被疵之處。自綱連則賜書。其文曰。

昨日之手疵無心元候。のり馬矢に當申由、當分不自由たるべく候間、馬一疋遣候。足能候。又其手之足輕近藤死申候由、不便に候。子共有之候哉、よび出し可申候。猶中村可申候。

十一月十九日

綱連

山田十郎殿

永祿四年正月山田義則主、長對馬守續連が七尾邸へ來臨の

時、拜謁人の内に山田十郎兵衛とあるは、右十郎の嗣子なりといへり。按ずるに、山田氏の始祖は長家譜にも、長谷部信連六男六郎某、大屋庄山田之地頭。とありて、其の子孫山田六郎左衛門と稱し、長家に於て家子五家の一にて、長氏の庶家なり。故に今は長某と稱せり。山田は能登國風至那の郷名にて、郷内院内村に山田氏祖先の館跡あり。能登路記に云ふ。山田郷は、昔長家の類葉山田式部大夫秀次と云ふ人の領地にて、其の館跡は郷内なる院内村にあり。位牌等は郷内の西安寺村に最安寺といふ禪寺にあり。といへり。又風至郡前波村諸橋次郎兵衛の所藏なる弘治二年正月廿九日黒瀧長與市景連等連判書宛名に、山田左近助殿とあり。是も山田氏の先代なるべし。その歴代等の巨細は追考すべし。

○伊久留了意傳話

信連記に云ふ。長の一類に重連と云ふ者あり。伊久留といふ所に在城して、近郷の目代也。子孫に至つて、假名を伊久留と稱しけり。さて永祿・元龜の比より天正の初まで、河内の山田能登の山田兩家繁昌なりしかと、天正三年に河内の

山田は滅亡しけり。こゝに能登の山田及び長谷部氏をも討亡し一國を押領せんと、温井三宅・黒瀧長與市など語らひ、越後景勝に手入し、長谷部の一族をば我が館へ請待して悉く討取り、上方への外聞として、長對馬守父子五人の首を加州大野濱に獄門にかけ、高札を建て置きたりけり云々。對馬守が末子連龍は妾腹にて、長松と稱し、生れ付達者にて物靜かなる故、出家させよからんとて、眞言宗孝恩寺へ預らるゝ也。長の家來伊久留了意といふは、本は長の一族にて、長左衛門尉景連より十九代の孫也。智仁勇をかねたるものなれば、連龍を上方へ證人に遣す時、故對馬守一類家老と議定して、了意をば添へたりけり。長家の郎等討洩されし者共、上方へ落行きて、連龍に能登にての始末を委細に告げゝる故、扱々無念なる事哉、一類を討亡され、世にながらへて無詮。何とぞ智略を以て、遊佐・温井等を討取るべしと、只一筋に思ひ定めて、能州の次第をば信長公へ申上げ、某に御暇給はり、能登へ罷越し、親の死骸をも見届け、敵の様子をも見聞仕り、御下知を請申度しと涙を流し申ければ、未だ若輩の身として遠慮ある申やう哉、兎もかくも

と仰せければ、頓て家來の伊久留了意と談合し、信長公へも願ひ申上ぐると也。扱了意は、古紙子を身にまとひ、伊勢山伏にさまをかへ、連龍の判形ある廻文を紙子のえりに縫ひふくめ、暇乞の盃をば連龍より申請け、涙と共に立出づる道すがら思案しけるは、穴水の榮齋禪門は、其の心剛にして大智なるもの也。其上長谷部家へは情も請けし者なれば、かれを語らはんと思ひ定め、能登路に着くとひとしく、榮齋が門の邊に立ちより、何となく勸進を乞ひて、能々家内を見濟し、榮齋様の御目に懸り度しと、せきばらひしけり。榮齋有合はせ、せきばらひの鉢、用有者と心付き、するくくと立出で、あらぬ名を云懸けて、つくくと見て、裏口へ廻れと目くばせして、榮齋は内に入り、女房にさ、やき、伊久留了意の御越也、妻戸を明けよといひければ、了意立入り、三人共に先づ泪を流しけり。了意に粥を振廻ひ、昔今の物語終へて後計策の事云出しければ、榮齋承り、扱々大悦の事也。心を合はせ申さんと領掌す。了意廻文を取出しければ、榮齋見て、さりとては了意とも思はれぬ。敵に捕はれ、若し此廻文顯るゝものならば、末代迄も不覺